

インターアクションにおける共食文化と言語

小池 千里*

1. はじめに

近年、子供達の孤食が社会問題として挙げられ、共食―「誰かと食事を共にする（共有する）こと」の大切さが重要視されているが（足立 2010 等）、大人社会においても家族だけでなく友人や同僚との共食は大切な社会的活動の一つだと言える。「食と言語」の研究が進んで来ているが（Szatrowski 2014 等）、本研究では、共食と言語に関して、会話の参加者が友人や同僚との共食の場面でのどのようなインターアクションを行っているかを考察する。特に、「食べ物を分け合う」という行動に焦点を置き、1)「なわ張り」、2) 領域、そして、3)「ウチ」と「ソト」の3つの観点から言語・非言語行動を分析する。

2. 先行研究

神尾（2002 等）は「情報のなわ張り」理論で、ある情報に対する話し手と聞き手の認識度に基づいて、情報が「なわ張り内」か「なわ張り外」か判断され、それによって適切な発話の文末形式（例えば「ね」「らしい」「そうだ」等）が使用されると提唱している。この「内と外」という概念は言語と文化の分野で多岐に渡って研究されて来ているが（三宅 2011; Quinn 1994 等）、その中でも言語と食と空間に関して牧野（1996）は、日本人は「同じものを食べて、同じ味を味わいながら、談笑することにより、ウチ意識を高めようと」とすると指摘している（p. 30）。しかしながら、実際のイン

ターアクションの中でのなわ張り（Hayano 2011; Heritage 2012 等）やウチとソトの概念に関しての研究はまだ少なく、これらの非言語行動の側面に関してもまだ分析の余地がある。本研究では日本語母語話者の自然な会話のビデオデータを用いて、情報と物のなわ張りとうちとソトという観点から、参加者がどのような言語表現・非言語行動を用いて「プラス配慮」（三宅 2011）としての思いやりを示しながら共食をしているかについて考察することを試みる。

3. 分析

分析の結果、共食の場面では参加者は、話し手聞き手の食べている物に関する情報の認識だけでなく、食べ物が置かれている場の個人領域（private domain; 図中点線で表示）と公共領域（public domain; 図中実線で表示）、また、共有している食べ物と共有していない食べ物、について認識しながら共食という社会的活動を行っていることが分かった。そして、食べ物を分け合う時、それらの領域と食べ物に対する認識の違いによって、参加者は異なる言語・非言語行動を用いるということが明らかになった。そこで、本研究では共食のアクティビティーを、（1）一緒に注文した食べ物を分けて食べる場合、（2）自分が作った物を分けて食べる場合、（3）自分が注文した食べ物を分けて食べる場合、の3つの場合に分け、それぞれの状況において参加者がどのような言語・非言語行動を用いて、相手に対する思いやりの心を示しなが

* カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校

ら共食をしているかについて分析していく。

第一に、一緒に注文した食べ物を分けて食べる場合では、会話例1と2に見られるように、共有の食べ物を参加者みんなが平等に分け合って食べられるように、という配慮を表す言語表現・非言語行動が観察された。会話例1では、会社の同僚3人（この内 Fujio は後輩）が居酒屋で、一緒に注文した白菜サラダを相手に勧めたり、食べたかどうか確認したりしている。

会話例1：白菜サラダ

- 1 Seiji: おいしそー。
 ((Seiji: 椎茸料理に手を伸ばす))
 2 Taku: おいしいよ。
 →3 Fujio: これねー、@おいしいですよ。@
 ((Fujio: 左手でサラダの皿を回す))
 4 Taku: 白菜。
 ((Fujio: サラダの皿を取り上げる
 Taku: サラダの皿を見て箸を持ち上げる))
 →5 Fujio: 食べてみて
 →6 Fujio: ください。

図1：((Fujio: サラダの皿を Seiji の方に動かす))



- ((Taku: 左手を伸ばす
 Fujio: サラダの皿を Taku の方に動かしながら軽く2回うなずく))
 →7 Taku: おいしいなー//これ。
 8 Fujio: //うん。
 →9 Taku: 食べた？
 ((Taku: サラダの皿を持って Seiji を見る))
 10 Seiji: うん。
 11 Fujio: うん？
 1 で Seiji が「おいしそー」と言いながら体を

左に傾け右手を伸ばして椎茸料理を取る。この推量表現「～そう」は Seiji がまだ椎茸料理を食べていないという認識を示している。そして、3で Fujio が白菜サラダの皿を回しながら「これねー、@おいしいですよ。@」とサラダの評価を言い、5で Seiji の方に皿を持ち上げて近づけ「食べてみて」と依頼表現を使って Seiji に白菜サラダを勧めている(図1参照)。Fujio は3の発話の終助詞「よ」、そして5の「～みて」によって、発話の受け手の Seiji がまだサラダを食べていないという認識を表示しつつ、Seiji からは一番遠い位置にあるサラダを Seiji が取りやすいように近くに持っていくことによって、まだ食べていない参加者にサラダを勧めている。しかし、6で依頼表現の「ください」と勧める発話を言い終える段階で、Taku が手を伸ばしてサラダを取ろうとしているのに気がつき、Fujio は Taku を見て2度軽く頷きながらサラダを Seiji ではなく Taku に渡す。

もう既にサラダを食べている Taku は7で Fujio に向かって「おいしいなー//これ。」と白菜サラダの評価に対する同意を示すが、自分の皿にサラダを取る前に、9で Seiji を見ながら「食べた？」と聞く。9の質問は Seiji がサラダを食べたかどうか知らないという Taku の認識を示しており、自分がまたサラダを取る前に他の参加者がもう食べたかどうか確認するという配慮行動を表している。3と5の Fujio の評価と勧める表現も9の Taku の質問も、「一緒に注文した料理は、相手のことを常に考えながら他の参加者と平等に分け合って食べる」という、共食の場の思いやりの言語・非言語行動を明確に例証している。

会話例2は3人が一緒に注文した白菜サラダとピザを食べながらテーブルの上に置いてあるマイクについて話しているところであるが、ここでは共食の相手と平等に分け合って食べようとする配慮を示す言語行動が、料理の最後の残りを取る時に観察された。

会話例 2: 最後のピザとサラダ

((Fujio: サラダの皿を持って箸でサラダをかき集めている))

1 Seiji: 感度どのぐらいあるんやろなあ。

((Seiji: ピザの最後の一切れに手を伸ばす))

2 Fujio: //ですよね。

→3 Seiji: //いただきます。

図 2 : ((Seiji: 最後の一切れのピザを持ち上げる))



→4 Fujio: あ、どうぞー。じゃこっちもいただきますね最後。

((Fujio: 残りのサラダを自分の皿に移す))

1 で Seiji がマイクについて「感度どのぐらいあるんやろなあ。」と言いながら、大皿の上にあるピザの最後の一切れに手を伸ばし、3 でその最後の一切れを持ち上げた時に「いただきます」と言う(図 2 参照)。皿の上にピザが二切れ以上残っていた時には参加者は何も言わずに取っていたが、最後の一切れを取る時だけに Seiji が「いただきます」と言ったことから、ここではこの「いただきます」という挨拶が、料理の最後を取る自分の行動について相手へ断りの意を表示するために使われているということが分かる。Seiji の最後のピザを取る断りに対して、4 で Fujio は「あ、どうぞー。」と言い承認の意を示してから、「じゃこっちもいただきますね最後。」と言いながら、箸でかき集めていた白菜サラダの残りをを全部自分の取り皿に移す。この Fujio の最後の残りを取る時の断りの発話からは、共食の場で多数の料理を一緒に注文した場合、一つの料理を平等に分配して食べるだけでなく、テーブルに並んでいる全部の料理を平等に分け合って食べられるように、参加者は全部の料理の分配状況に随時気を配って食べていると

ということが窺える。紙面の都合上分析は省くが、他の会話データの中でも料理の最後の残りを相手に勧める、また取る前に全部取ってもいいかどうか確認するなどの言語表現が見られたことから、一緒に注文した料理の最後の残りを食べる場面では、参加者が特に思いやりや気遣いを示す様々な共食の配慮行動をとると言える。

第二に、自分が作った物を分けて食べる場合には、会話例 3 に見られるように、料理の公共領域と個人領域を認識しながら、参加者がお互いに作った料理に関して評価をし合うという言語行動が観察された。会話例 3 はルームメートの Eri と Maki が一緒に晩ご飯を作って食べている時の会話であるが、主菜の麻婆豆腐は一緒に作り、副菜(図 3 中では麻婆豆腐の奥に位置する)のかぼちゃは Maki が、ナムルは Eri が作り、それを分け合って食べている場面である。

会話例 3: かぼちゃとナムル

1 Eri: いただきます。

2 Maki: ごめん。もっちゃった。ふふ。

3 Eri: あ、いいよ、全然。

4 (0.8)

5 Eri: ちょっとさー、ちょっとかぼちゃ 1 個食べる。°

図 3 : ((Eri: かぼちゃを皿から一つ箸で取る))



6 Maki: かぼちゃ、(1.2) 焦げてて蒸れてた。

7 Eri: あ、おいしいよ?

8 (1.0)

9 Eri: 甘い。

10 Maki: いただきますー。

11 (0.4)

12 Maki: ナムルもらいまーす。

((Maki: ナムルを皿から箸で取る))

13 Eri: はい。

14 (0.6)

15 Eri: あかね? ちょっと塩っぱいかもしんない。ちょっとねー、量をねー、(1.2) 間違えた。

16 (1.2)

17 Eri: よいしょ。

→18 Maki: すごいおいしい。

→19 Eri: 本当?

→20 Maki: //うん。

→21 Eri: //ありがとう。

まず、会話例3の料理の領域に関してであるが、一緒に作った麻婆豆腐に関しては評価表現、そして料理を取る前に断る表現は見られなかった。それに対し、Maki が作ったかぼちゃと Eri が作ったナムルに関しては評価表現、そして相手が作った料理を食べる時に取ることを言う表現 (例: 5 Eri 「° ちょっとさー、ちょっとかぼちゃ1個食べる。°」と 12 Maki 「ナムルもらいまーす。」) が観察された。このことから、一緒に分け合って食べているにも関わらず、誰が作ったかによって、参加者は公共領域 (一緒に作った麻婆豆腐) と個人領域 (各々が作ったかぼちゃとナムル) を認識して共食しているということが窺える。

次に、会話例3の料理の評価表現に関しては、まず自分の作った料理に対して否定的な評価をし、それに対して相手が肯定的な評価をするという言語行動のやりとりが見られた。Eri がかぼちゃを1個取り上げた後に (図3参照)、6で Maki が「かぼちゃ、(1.2) 焦げてて蒸れてた。」と自分の作った料理について否定的な評価をしているが、それに対して Eri がかぼちゃを食べた後に7で「あ、おいしいよ?」、9で「甘い。」と Maki の否定的な評価に同意せず、肯定的な評価を終助詞「よ」を使って主張している。続いて、Maki がナムルを取った後に、15で Eri が「あかね? ちょっと塩っぱいかもしんない。ちょっとねー、量をねー、(1.2) 間違えた。」と否定的な評価をしているが、Maki は食べた後に、18で「すごいおいしい。」と、Eri

の否定的な評価に同意せず強調副詞を使って肯定的な評価をしている。このように、自分が作った物を分けて食べるという共食の場面では、相手が自分の料理を食べる前に先に自分が否定的な評価を言うが、これは自分の料理に対して相手がどんな評価でも言いやすいようにという配慮の現れではないかと考えられる。また、食べた相手の方は反意を示す肯定的な評価を「よ」や強調表現で強く主張するが、Eri が21で札を言っていることから分かるように、共食の場での相手の料理に対する肯定的な評価表現がよりよいウチ関係を築くのに貢献していると言えるだろう。

第三に、自分が注文した食べ物を分けて食べる場合では、会話例4と5に見られるように、共食の場の個人領域と公共領域が変動すること、そして相手が自分の食べ物を取り分けやすいように促す言語・非言語行動が観察された。会話例4～6は会社の同僚の Narumi (先輩) と Taeko (後輩) が会社帰りにファミリーレストランで、それぞれ違う料理 (Narumi はエビチリ、Taeko はハンバーグとご飯) を食べている場面である。会話例4ではご飯を、会話例5では主菜を分け合っている。

会話例4: ご飯

→24 Taeko: //＝ご飯でもよかったらちょっとー、(0.2) 少し食べません?

((Taeko: ご飯の皿を左から二人の料理の皿の間に動かす))

25 (1.4)

26 Narumi: >いやでも=<

27 Taeko: //ご飯あんまり、

28 Narumi: //＝あんまり食べるとー、＝

→29 Taeko: //あ、そうなの?

((Taeko: ご飯の皿を左に動かす))

30 Narumi: //＝一応帰ってからもう、

31 Taeko: あ、そうなの?

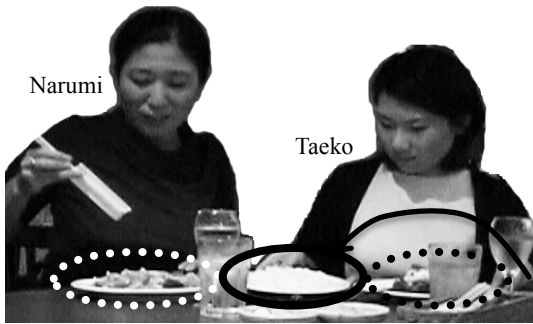
32 Narumi: 多少は食べよかなー//と言ってたりとか。

33 Taeko: //ああ、そう。

34 Narumi: 一応旦那がいるんで。

→35 Taeko: ああ。

図 4 : ((Taeko: ご飯の皿を二人の料理の皿の間に置く))



36 (1.4)

→37 Taeko: まあ、でもよかったら。

ウエイトレスが料理を持って来た後、24 で Taeko は自分の左側に置かれていたご飯の皿を二人の料理の皿の間に動かしながら、「ご飯でもよかったらちょっと、(0.2) 少し食べませんか?」と言って、ご飯を注文しなかった Narumi に勧める。しかし、Narumi が 26 と 28 で「>いやでも=<」「/=あんまり食べると、=」と言って、Taeko のご飯の勧めを断る表示をしたため、Taeko は 29 で「// あ、そうなの?」と言ってご飯の皿を左の方に動かす。その後、30 から 34 で Narumi が帰ってから少し夫と食べるつもりでいるという理由を言ったのを受け、Taeko は再びご飯を二人の料理の皿の間に置いてから (図 4 参照)、37 で「まあ、でもよかったら。」ともう一度ご飯を勧める。ここでは、Taeko が自分の個人領域であったご飯を、相手の反応を注意深く観察しながら二人の料理の間に動かすことによって二人の公共領域 (図 4 中実線で囲まれた領域) に変えているが、皿を動かすという非言語行動にも、そして副詞「よかったら」という言語表現にも相手が自分のご飯を分け合いたいという配慮行動が見られる。

会話例 5 は Narumi と Taeko が Narumi の夫について話しながら自分の主菜を食べているところ、ここでも会話例 4 と同様に、相手と料理を分け合って食べやすいようにという思いやりの言語・非言語行動が見られるが、会話例 4 では参加者は自

分の個人領域の中に公共領域を作るというストラテジーを用いている。

会話例 5: メインディッシュの味見 パート 1

1 Taeko: すごーい。

((Taeko: ご飯の皿を中央から左に置く))

2 Narumi: かawaii//そうやな。

3 Taeko: //なん、お酒飲みましたっけ。

4 Narumi: 飲まない。

→5 Taeko: あ、>飲まない。<

((Taeko: ハンバーグの皿を右に寄せる))

→6 Taeko: これよかったらほんとに食べてくださいね。

→7 Taeko: 割っときますから。

((Taeko: ハンバーグをナイフで小さく切る))

8 (1.0)

9 Taeko: このたまご、こう、あ、やだー。おいしそう。

10 (1.2)

→11 Narumi: これ 1 個食べよ。むちゃむちゃうまいでー。

図 5 : ((Narumi: 箸で皿の上のエビを 1 つ左に寄せる))



12 Taeko: うん。ちょっと 1 個欲しい。

13 Narumi: うん。

Narumi の夫について話しながら、Taeko は 1 で二人の真ん中に置いていたご飯を自分の左側に戻し、5 で自分の主菜のハンバーグの皿を少し右側 (Narumi の方) に寄せる。続いて 6 で Taeko は「これよかったらほんとに食べてくださいね。」と言った後、7 で「割っときますから。」と言いながら、ハンバーグの右端の方をナイフで小さく切り分け始める。Taeko の主菜を分ける行動を受けて、

Narumi の方も 11 で「これ 1 個食べよ。むちゃむちゃうまいで。」と言いながら、自分のエビチリの皿の上でエビを 1 つ左の方 (Taeko の方) に寄せる (図 5 参照)。Taeko は副詞「よかったら」や「ほんとに」という表現、そして Narumi は強調表現「めちゃめちゃ」「とても」に当たる関西弁) や文末表現「で」(終助詞「よ」に当たる関西弁) を使い、相手に自分の料理を強く勧めている。しかし、言葉で言うだけでなく、食べ物を切り分けたり相手の方に少し食べ物を寄せたりするという非言語行動によって、自分の個人領域 (図 5 中点線で囲まれた領域) の中に公共領域 (図 5 中実線で囲まれた領域) を作り、相手が自分の主菜の皿から食べ物を取って分け合いやすいように取り計らっている。会話例 5 の積極的に食べ物を勧める言語・非言語行動は、個人領域の食べ物を相手が気兼ねなく共有しやすいようにという配慮の現れと言っていていいだろう。更に、会話例 4 と 5 から分かるように、個人領域と公共領域というのは一定の決まったスペースではなく、共食をしながらインターアクションの中で絶えず流動的に変わっていくものであると言える。

会話例 4 と 5 では自分が注文した食べ物を分けて食べる場合を分析したが、この会話例の後に見られる二人のやりとりを見ると、自分の料理を分け合って食べるというアクティビティーがもたらすインターアクションの効果が窺える。会話例 6 は会話例 5 から約 9 分後のやりとりであるが、ここでは Narumi と Taeko がエビチリについて評価をしている。

会話例 6: メインディッシュの味見 パート 2)

((Taeko: もらったエビチリを食べている))

7 Narumi: 見たらすぐわかるって言った。

8 (7.2)

((Narumi: 肘をつき左の方を見る))

→9 Taeko: ° なるほどー。° あっ、このエビおいしっすね。

→10 Narumi: うまいやろ?

((Narumi: Taeko を見て微笑みながら

Taeko の方に上半身を傾け頷く))

→11 Taeko: うん。おいしい。

→12 Narumi: なあ。

→13 Taeko: うん。

→14 Narumi: ° なんか。°

→15 Taeko: ちゃんと処理して//あるって感じ。

→16 Narumi: //うん。

会話例 6 の前から会話例 6 の 7 まで Narumi が二人の後輩 Ken についてストーリーテリングをしている。7 でストーリーが終了してから Taeko が 9 で「° なるほどー。° 」とストーリーに対する相づちを言った後、食べていたエビチリについて「あっ、このエビおいしっすね。」と肯定的な評価を言うが、Taeko はここで終助詞「ね」を用いることにより Narumi のエビチリの評価 (会話例 5 の 11) に対する同意を示している。ストーリーテリングが終わった後の 8 の長いポーズの間 Narumi は左の方を見ていたが、Taeko の評価を受けて、10 で Taeko を見て微笑みながら Taeko の方に上半身を傾けて一度頷き「うまいやろ? 」と、ここでもう一度エビチリに対する肯定的評価を確認要求の文末表現「やろ? 」(「でしょ? 」に当たる関西弁) を使って主張する。この後 11 から 16 まで二人は笑顔で顔を見合わせ、エビチリについての肯定的な評価をし合って同意の意を示している。更に、Narumi と Taeko が仕事の話をしている場面では Taeko は先輩の Narumi に対して丁寧語で話しているが、食べ物を分け合ったり食べ物の評価をし合ったりする時には Taeko が時折くだけた表現を使っている (例: 会話例 5 の 12 と会話例 6 の 11)。このように、会話例 6 の言語表現や非言語行動からわかるように、自分の料理を分け合って食べ、それに対して肯定的な評価のやりとりをすることによって、インターアクションの中でよりよいウチ関係が築き上げられていくのだと言える。

4. まとめ

共食の意義は、食べている食事そのものよりも、一緒に食べている相手と相互作用を持つことにあり、特に、同じ食べ物を一緒に分け合って食べながら歓談することによって、より一層共食の効果がもたらされると思われる。本研究で指摘したように、この共食のアクティビティーでは、個人領域、公共領域のある共食の場で、どのような言語表現・非言語行動を使って配慮を示し、いかに食べ物を分け合って食べるかが重要な点である。集団社会のメンバーは、インターアクションの中で効果的な言語・非言語行動を用いながら協力的に分け合って食べることににより、よりよいウチ関係を築いていくことができるのではないだろうか。

文字化資料の表記方法 (Szatrowski 2014 を参照し、小池が簡略的に和訳したもの)

- 。 文末の下降のイントネーション
- ? 上昇のイントネーション (疑問を表す訳ではない)
- 、 極短いポーズを後に伴う継続のイントネーション
- @ @ 笑い声で発せられた発話
- ° ° 比較的静かな声で発せられた発話
- (0.7) 秒単位で記されたポーズ。先行発話との相対的な長さで(0.7)は0.7秒を表す。
- // 重複している発話の重複開始位置
- 先行する母音が撥音が伸ばされていることを示す。
- >< 素早く押し詰めて発せられた発話

- = 同じ話者による区切れやポーズがない連続した発話、または違う話者によって繋がっている発話
- (()) 発話時に現れた非言語行動

参考文献

- 足立己幸 (2010)『家族と“食を共にすること” 共食の大切さ』『親子のための食育読本』pp. 13-21
内閣府食育推進室発行
- 神尾昭雄 (2002)『続・情報のなわ張り理論』大修館書店
- 牧野成一 (1996)『ウチとソトの言語文化学-文法を文化で切る』アルク
- 三宅和子 (2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房
- Hayano, K. (2011). Claiming epistemic primacy: Yo-marked assessments in Japanese. In T. Stivers, L. Mondada, & J. Steensig (Eds.), *The morality of knowledge in conversation* (pp. 58-81). Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. (2012). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language & Social Interaction*, 45(1), 1-29.
- Quinn, C. J. (1994). The terms uchi and soto as windows on a world. In J. M. Bachnik & C. J. Quinn (Eds.), *Situated meaning: Inside and outside in Japanese self, society, and language* (pp. 38-72). Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Szatrowski, P. (Ed.). (2014). *Language and food: The verbal and nonverbal experience*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.